

2021年度 北陸大学特別研究助成【 若手・女性研究 】 報告書

代表者	所属	医療保健学部	職位	准教授	氏名	関谷 暁子
-----	----	--------	----	-----	----	-------

研究課題名	多職種協働実践の担い手を育成する 「コンピテンシー基盤型多職種連携教育プログラム」の開発および効果の検証
-------	---

交付額	600,000	円
-----	---------	---

研究成果の概要

保健医療福祉専門職養成校および医療機関における多職種連携教育(IPE)/多職種協働実践(IPW)の推進に資するため、「多職種連携コンピテンシー」を組み込んだ教材および教育プログラムを開発、実施し、その教育効果を検証した。「教育プログラムの効果」については、「教育プログラムに対する満足度」「IPE/IPWへの関心の高まり」「立場の異なる人との繋がり」「自由に発言できる雰囲気」の各項目について高い評価を得た。また、学生の「卒前IPEに対する態度の変化」について、検討した15項目のうち11項目において、参加者の80%以上がポジティブな変化があったと回答した。IPE/IPWに関心の高い人々を対象とした限定的な試行ではあるが、将来的に正課課程でも利用可能な教材を作成できたとともに、今後継続してIPEプログラムを開発、効果の検証するための基礎となる知見が得られた。

研究目的

【背景】高齢化および医療の高度化に伴い、慢性疾患を複数抱える高齢者や、核家族で介護者のいない高齢者など、医療だけではない社会課題を内包する事例が増え、保健医療福祉を取り巻く状況は複雑化している。この複雑な状況に対応するため、多職種が専門性や所属を越えて連携する多職種協働実践(Interprofessional Work: IPW)、およびIPWに必要な能力を涵養する多職種連携教育(Interprofessional Education: IPE)の重要性とニーズが増している。しかしながら、本邦の保健医療福祉領域におけるIPEは諸外国に比べて遅れている。全国の保健医療福祉職養成機関のうち、IPEを実施している大学は63.6%、専門学校などでは15.2%に留まる。IPEの正課教育への実装の障壁となっているのは、専門職間に存在するヒエラルキーとセクショナリズム、過密なカリキュラムの中での調整の困難さ、IPEの意義や方法、評価等に関する知見の少なさ等である。

【着想に至った経緯】申請者らは、多職種の有志とともに「サードプレイスIPE」と称する自主企画のIPEプログラムを実践している。「家でも職場（学校）でもない第三の居場所」である「サードプレイス」にはIPEの障壁となるヒエラルキーやセクショナリズムが存在せず、所属の異なる保健医療福祉領域の学生や実務者がフラットに学び合っている。この経験から、既存の枠組み（養成校の正課課程や政府主導）の中では実施困難な教育プログラムの開発や効果の検証を「サードプレイスIPE」で実施することが可能なのではないかという着想に至った。

【本研究の目的】本研究の目的は、2016年に日本保健医療福祉連携教育学会（JAIPE）が提唱した「多職種連携コンピテンシー」を組み込んだ教材および教育プログラムを開発し、「サードプレイスIPE」にて実施し、その教育効果を検証することである。中長期的な目標は、開発された教育プログラムを保健医療福祉専門職養成校の正課課程および実務者の生涯教育に提供し、IPEの普及に資することである。研究のスタートアップとなる2021年度は、IPE/IPWに既に興味、関心がある学生や実務者の協力を得て、それぞれが所属する養成校や医療機関での現在のIPE/IPWの実施状況およびIPEプログラムへの期待（ニーズ）を調査した。また、プログラムに参加した学生を対象に、開発したプログラムがIPEに対する態度の変化をもたらしたかどうかを検証した。このことにより、今後継続してIPEプログラムを開発、効果の検証するための基礎データを得た。

研究の方法

1. 教育プログラムの立案および教材の作成

IPEの国際的な定義である「多職種が同じ場所で共に学び、お互いから学び合いながら、お互いのことを学ぶこと」を組み込んだ、3時間程度の教育プログラムを立案する。あわせて、プログラムの中で学習者が使用する教材（動画、事例シナリオ、ワークシート等）を作成する。

2. 教育プログラムの実施およびデータの取得

立案したプログラムを、申請者らが運営する「サードプレイスIPE」である「とやまいびー」「あいまいびー」において、北陸地方で保健医療福祉専門職を養成する大学、短大、専門学校で学ぶ学生および実務者を対象に実施する。参加申し込み時のアンケートにて「現在の所属でのIPE/IPWの実施状況」、「IPE/IPWについて課題と感じていること」および「IPEプログラムへの参加の動機」についての回答を得る。また、参加後のアンケートにて「教育プログラムの効果」および「今後のIPEプログラムへの期待」についての回答を得る。

プログラム参加者のうち、保健医療福祉専門職の養成課程で学ぶ学生に対して、上記に加え「卒前IPEに対する態度の変化」についての回答（自己評価）を得る。卒前IPEに対する態度の変化を測る指標として、Curranらが開発した“Attitudes towards interprofessional learning in the academic setting”を牧野らが日本語に翻訳したものをを用いる(2)3)。

3. 教育効果の検証

取得したアンケートの結果を分析する。

研究成果

1. 立案・実施したIPEプログラム

2021（令和4）年度中に3度のIPEプログラムを立案・実施した。すべてオンライン形式で実施された。各回のテーマおよび到達目標に応じて、ワークシート、事例シナリオ、事前視聴用動画などの教材を作成した。のべ参加者数は89名（学生44名、実務者37名、教育者8名）であった。

2. アンケートの分析結果

上記の3つの教育プログラムに、2020年度のプログラム、および、他団体との共催で実施したプログラムを加えた合計7つのプログラムの参加者に対してアンケートを実施し、分析に使用することを同意の上で回答を得た。

①参加者が置かれているIPE/IPWの現状（参加申し込み時アンケートの分析）

所属機関でのIPE/IPWの実施状況について、「IPE/IPWが実践されている」と答えた人は全体の47%であった。学生、実務者、教育者に分けてIPE/IPWの実施率は、学生では34%、実務者では67%、教育者では50%であった。

「IPE/IPWについて課題と感じていること」として「IPE/IPWについて学ぶ機会の不足」「IPEの効果や意義についての知見の不足」、「実施に向けた調整の困難さ」が挙げられた。また、「IPEプログラムへの参加の動機」として「テーマの内容に興味がある」「（テーマに関して）様々な職種の視点を知りたい」「多様な人と交流したい」等が挙げられた。

②本研究課題において開発したIPEプログラムの評価（参加後アンケートの分析）

「教育プログラムに対する満足度」は1（不満足）— 5（満足）の5段階リッカート尺度で平均値が4.7、「IPE/IPWへの関心の高まり」は1（高まらなかった）— 5（高まった）での平均値が4.7、「立場の異なる人との繋がり」は1（広まらなかった）— 5（広まった）での平均値が4.5、「自由に発言できる雰囲気」は1（なかった）— 5（あった）での平均値が4.6であった。自由記述の回答では、「グループワークの感想」として「所属や立場の異なる人たちと出会うことができた」「話しやすい雰囲気だった」「自分にはない考えを聴くことができた」等が挙げられた。また、「今後のIPEプログラムへの期待」として「教育実践の事例検討」「医療における具体的な症例（認知症、急性期医療、在宅医療など）の検討」「多職種連携の実践」等が挙げられた。

③コンピテンシーに関する尺度を用いた評価

保健医療福祉専門職の養成課程で学ぶ学生40名より回答を得た。IPEに対する態度を示す15項目のうち11項目において、参加者の80%以上がポジティブな変化があったと回答した。それ以外の4項目のうち1項目は75%、2項目は65%がポジティブな変化があったと回答した。残る1項目は45%であった（逆転項目であったために誤った回答がされた可能性がある）。

3. 総括および今後の展望

研究期間中に3度のIPEプログラムを開発、実施するとともに、将来的に正課課程でも利用可能な教材を作成できた。新型コロナウイルス感染症流行のため、すべてのプログラムがオンラインでの実施となったが、オンラインによるIPEプログラムの運営のノウハウが蓄積されたことは収穫であった。事前アンケートより、学生は実務者に比べて異なる職種と関わる機会が少ないことがうかがえた。また、事前アンケートおよび事後アンケートの分析から、申請者らが開発したプログラムは、参加者の「IPE/IPWについて課題と感じること」や「プログラムの参加動機（ニーズ）」に答え得たと考えられた。さらに、学生のIPEに対する態度にポジティブな変化が期待できるものと考えられた。

一方、今回のアンケート協力者のうち2/3はIPEを既に経験した人たちであり、残り1/3も自発的にプログラムに参加した人たちである。したがって、養成校の正課課程や院内研修等に想定される学習者層とは大きく異なることに留意が必要である。事前アンケートに「課題」として挙げられたように、IPEプログラムの実装には様々な調整が必要であり、実施者のチームワークが重要である。正課課程に実装するには、教材だけでなく、教員向けのマニュアルや研修等も必要になるであろう。

最後に、本研究課題の成果をもとに、申請者らは「IPEを実施する教師のコンピテンシー開発」をテーマとして科研費を申請し、採択されたことを申し添える。

4. 参考文献

- 1) Haruta, J. et al (2018). Development of an interprofessional competency framework for collaborative practice in Japan. *Journal of interprofessional care*, 32(4), 436-443.
- 2) Curran, V.R. et al. Attitudes of health sciences faculty members towards interprofessional teamwork and education. *Medical Education* 2007; 41: 891-96.
- 3) 牧野孝俊, 他. チームワーク実習によるチーム医療及びその教育に対する態度の変化: 保健学科と医学科学生の比較検討. *保健医療福祉連携* 2010; 2: 2-11.

主な発表論文等

【学会発表】

1. 臼井千尋, 戸上央, 關谷暁子, 大村裕佳子: 卒前にサードプレイスIPEを企画・運営した学生の学び～今の視点を大切に、仲間とだからできること～, 第14回日本保健医療福祉連携教育学会, 2021年11月14日, **特別賞受賞**
2. 大村裕佳子, 關谷暁子, 他6名: 多職種の学生と実務者がともに学び合うサードプレイスIPE～いしかわ多職種連携教育プロジェクトあいまいびー～, 第14回日本保健医療福祉連携教育学会, 2021年11月14日, **特別賞受賞**

【HP】

1. まいぷるプロジェクトFacebookページ: <https://www.facebook.com/MAIPLEproject/>
2. 北陸大学ウェブサイトへの掲載: <https://www.hokuriku-u.ac.jp/sptopics/202203041005.html>
3. 南砺の病院家庭医が勉強記録を始めました (ブログ): <https://moura.hateblo.jp/entry/2022/03/13/102623>

組織				
分担・協力者	氏名	所属	職位	役割
協力者	清水 洋介	南砺家庭・地域医療センター	医師	とやま多職種連携教育プロジェクト「とやまいびー」の企画および実施
協力者	大村 裕佳子	石川県立こころの病院	看護師	いしかわ多職種連携教育プロジェクト「あいまいびー」の企画および実施